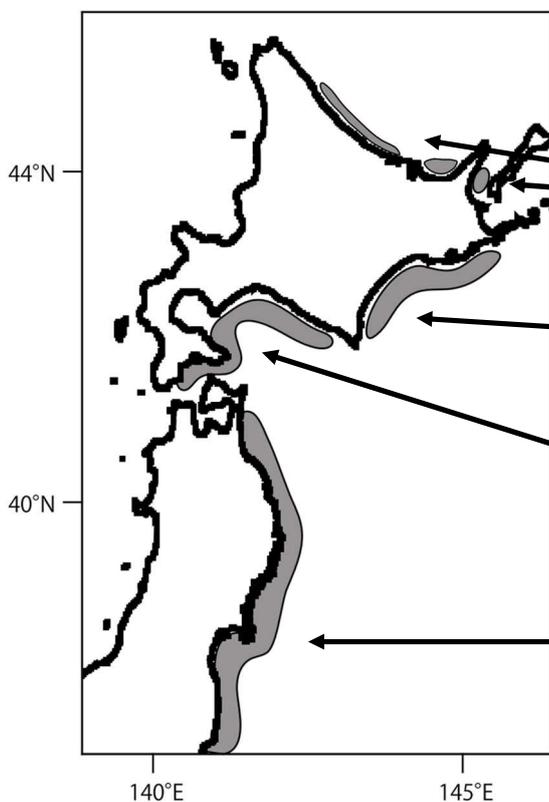




2020年度 第2回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し（2020年10月～12月）のポイント



スルメイカの来遊量は、道東太平洋海域、津軽海峡～道南太平洋海域、および常磐～三陸海域では前年を上回り、根室海峡～オホーツク海では前年を下回る。

根室海峡～オホーツク海：
来遊量は前年を下回る。
魚体は前年並。

道東太平洋海域：
来遊量は前年を上回る。
魚体は前年並。

津軽海峡～道南太平洋海域：
来遊量は前年を上回る。
魚体は前年並。

常磐～三陸海域：
来遊量は前年を上回る。
魚体は前年並。

問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構
担当：管理部門 渡邊、木村
浮魚資源部 西田、岡本
電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001
当資料のホームページ掲載先URL
<http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease>

2020年度 第2回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2020年10月～12月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：道東太平洋海域、根室海峡～オホーツク海、津軽海峡～道南太平洋海域、常磐～三陸海域

対象漁業：いか釣り、底びき網、定置網、まき網

対象魚群：主に冬季発生系群（2020年級群）

1. 道東太平洋海域（いか釣り、底びき網）

- (1) 来遊量：前年を上回る。
- (2) 漁期・漁場：漁場形成は散発的となる。
- (3) 魚体：前年並

2. 根室海峡～オホーツク海（いか釣り、定置網、底びき網）

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：漁獲のピークは前年の11月中下旬より早い。
- (3) 魚体：前年並。

3. 津軽海峡～道南太平洋海域（いか釣り、定置網）

- (1) 来遊量：前年を上回る。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前年並。

4. 常磐～三陸海域（いか釣り、底びき網、定置網、まき網）

- (1) 来遊量：前年を上回る。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前年並。

I 予報の説明

2020年8月～9月に実施した漁場一斉調査とイカ類南下期資源調査¹⁾の結果（以降、いか釣り調査と総称する）、および7月～8月（一部9月を含む）の漁況経過を主要な情報として太平洋における10月～12月のスルメイカの来遊量を予測した。その結果、以下の通り、道東太平洋海域、津軽海峡～道南太平洋海域、および常磐～三陸海域では前年を上回り、根室海峡～オホーツク海では前年を下回ると予測される。

¹⁾ 北海道立総合研究機構釧路水産試験場が独自に実施。

1. 道東太平洋海域

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沖合を北上する群が主体と考えられる。道東周辺海域（42°N以北、143°E以东）でのいか釣り調査による平均CPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）は前年を上回った。道東主要港における初水揚げは前年よりも遅く、8月の小型いか釣り船CPUE（1日1隻当たり水揚げ量）は前年を下回っていたものの、その後漁況は上向き、9月上旬のCPUEは前年を上回った（表1）。ただし、その値は依然として2016年以降の低い水準のままである。以上のことから、道東太平洋海域への来遊量は前年を上回るものの、漁場形成は前年同様に散発的になると予測される。魚体サイズは、いか釣り調査の結果から前年並の個体が主体になると考えられる。

2. 根室海峡～オホーツク海域

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沖合を北上する群が主体と考えられる。釧路以东（144°24'E以东）でのいか釣り調査によるCPUEは前年並であった。一方で、北方四島周辺の太平洋側の海域における7月下旬以降の平均海表面水温¹⁾、および10月までの予測水温²⁾（図1）には前年より低い海域・時期が散見されるため、スルメイカが太平洋からオホーツク海へ前年ほど多く回遊する状況ではないと考えられる。以上のことから、根室海峡～オホーツク海域への来遊量は、前年を下回ると予測される。オホーツク海沿岸の10月の水温は前年より低く予測されているため、漁獲のピークは前年の11月中下旬より早くなると予測される。魚体サイズは、いか釣り調査による釧路以东での結果から前年並の個体が主体になると考えられる。

¹⁾ 気象庁の札幌管区気象台が公表している日別海域平均海面水温（<http://www.jma-net.go.jp/sapporo/kaiyou/engan/engan.html>）。

²⁾ 国立研究開発法人水産研究・教育機構により開発され、2012年5月より運用を開始した海況予測システム（FRA-ROMS）による予測水温。

3. 津軽海峡～道南太平洋海域

この海域の漁獲対象資源は、津軽海峡～道南太平洋海域に分布する群と道東太平洋海域から南下する群が主体と考えられる。津軽海峡～道南太平洋周辺海域（41°N以北、143°E以西）におけるいか釣り調査のCPUEは前年を上回った。函館港と大畑港における8月の小型いか釣り船CPUEは前年を下回った（表1）。両港では、9月上旬のCPUEも前年を下回ったままである。一方で浦河港では、前年は9月中旬まで水揚げが無かったが、本年は8月上旬に僅かながらの初水揚げがあり、9月になって漁況が上向いている。以上のことから、津軽海峡～道南太平洋海域に分布する群は前年並と考えられる。また、前述の通り、道東太平洋海域への来遊量は前年を上回ると予測されている。以上のことから、津軽海峡～道南太平洋周辺海域への来遊量は前年を上回ると予測される。魚体サイズは、いか釣り調査の結果から前年並の個体が主体になると考えられる。

4. 常磐～三陸海域

この海域の漁獲対象資源は、常磐～三陸海域に分布する群と道東太平洋海域から南下する群が主体と考えられる。三陸周辺海域（41° N以南、143° E以西）におけるいか釣り調査のCPUEは前年（漁獲無し）を上回ったものの、漁獲のあった調査点は全10点中1点のみであり、依然として低水準である。宮城県主要港における8月の小型いか釣り船CPUEは前年を上回ったが、青森県白糠港では前年並、八戸港と岩手県主要港では前年を下回った（表1）。青森県主要港ではその後漁況が上向き、9月上旬のCPUEは前年を上回った（他の海域は集計中）。第1回長期漁況予報¹⁾では、移行域幼稚魚調査で多く採集された小さい個体が沿岸域に来遊してくるのは主に9月以降になると予測されている。以上のことから、常磐～三陸海域に分布する群は前年並と考えられる。また、前述の通り、道東太平洋海域への来遊量は前年を上回ると予測されている。したがって、常磐～三陸周辺海域への来遊量は前年を上回ると予測される。前年は同海域におけるいか釣り調査で漁獲が無かったため、魚体サイズの比較には、道東太平洋海域での調査結果および漁業情報サービスセンターによるスルメイカ漁況・市況情報を利用した。その結果、10月以降は前年並の個体が主体になると考えられる。

¹⁾ 7月29日にプレスリリースされた2020年度第1回太平洋スルメイカ長期漁況予報
(http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease/pr2020/20200729_t/20200729_t.pdf)。

II 調査結果

8月～9月に実施されたいか釣り調査の結果（図2）、調査海域全体の平均CPUEは0.92尾で、前年（0.17尾）を上回った（図3）。海域別に見ると、道東周辺海域では1.80尾であり、前年（0.45尾）を上回った。道東周辺海域のうち釧路以東では0.37尾であり、前年（0.37尾）並であった。津軽海峡～道南太平洋周辺海域では0.68尾であり、前年（0.15尾）を上回った。三陸周辺海域では0.03尾であり、漁獲が無かった前年を上回った。

漁獲物の外套背長組成の最頻値は20 cmにあり、前年（21 cm）並であった（図4）。海域別に見ると、道東太平洋海域での最頻値は20 cmで前年（21 cm）並であった。また、道東太平洋海域のうち釧路以東においても同様であった。津軽海峡～道南太平洋周辺海域では15 cmと20 cmが高頻度の二峰型を示し、前年（16 cmと21 cmが最頻値）並であった。三陸周辺海域では14 cmと15 cmの個体が1尾ずつ漁獲されたが、前年は漁獲が無かったため比較できない。

III 各海域の漁況経過

2007年以降の太平洋（根室海峡～オホーツク海を含む）における年間漁獲量¹⁾は7万～16万トンで推移していたが、2018年には1.7万トンまで減少した（図5）。2019年は僅かに増加し、2.4万トンであった。10月～12月に限定した累計漁獲量は、2007年以降5万～10万トンで推移していたが、2018年に7.2千トンまで減少した後、2019年に14.0千トンに増加した。主漁場は常磐以北の太平洋海域であり、来遊経路から常磐～三陸海域、津軽海峡～道南太平洋海域、道東太平洋海域、根室海峡～オホーツク海域に区分される。2019年10月～12月の常磐～三陸海域における漁獲量（生鮮）は5.1千トン、津軽海峡～道南太平洋海域では2.4千トン、道東太平洋海域では0.9千トン、根室海峡～オホーツク海では6.2千トン（図6）、千葉県以南の海域での漁獲量は22トンであった。2014年～2018年の平均に対する比は、常磐～三陸海域では45%、津軽海峡～道南太平洋海域では37%、道東太平洋海域では26%、根室海峡～オホーツク海では111%、千葉県以南の海域では24%

であった。

2020年7月～8月の太平洋沿岸域での水揚げ量²⁾（生鮮：速報値、一部未集計）は2.3千トンで、前年（3.4千トン）を下回った。そのうち、常磐～三陸海域の主要港では2.2千トンで、前年（2.8千トン）を下回った。津軽海峡～道南太平洋海域の主要港の水揚げ量は一部集計中だが、現状では0.1千トンで、前年（0.6千トン）を下回っている。道東太平洋海域の主要港では33トンで、前年（49トン）を下回った。根室海峡～オホーツク海では5トンで、前年（1トン）を上回った。千葉県以南の主要港では17トンで、前年（14トン）並であった。なお、参画道県における代表的な漁況経過を表1に示した。

¹⁾ 主要港漁獲量を漁業・養殖業生産統計年報の値で引き延ばしているため、図5、図6を含めた漁獲量は全て推定値である。

²⁾ 水揚げ量は単純積み上げた数値。

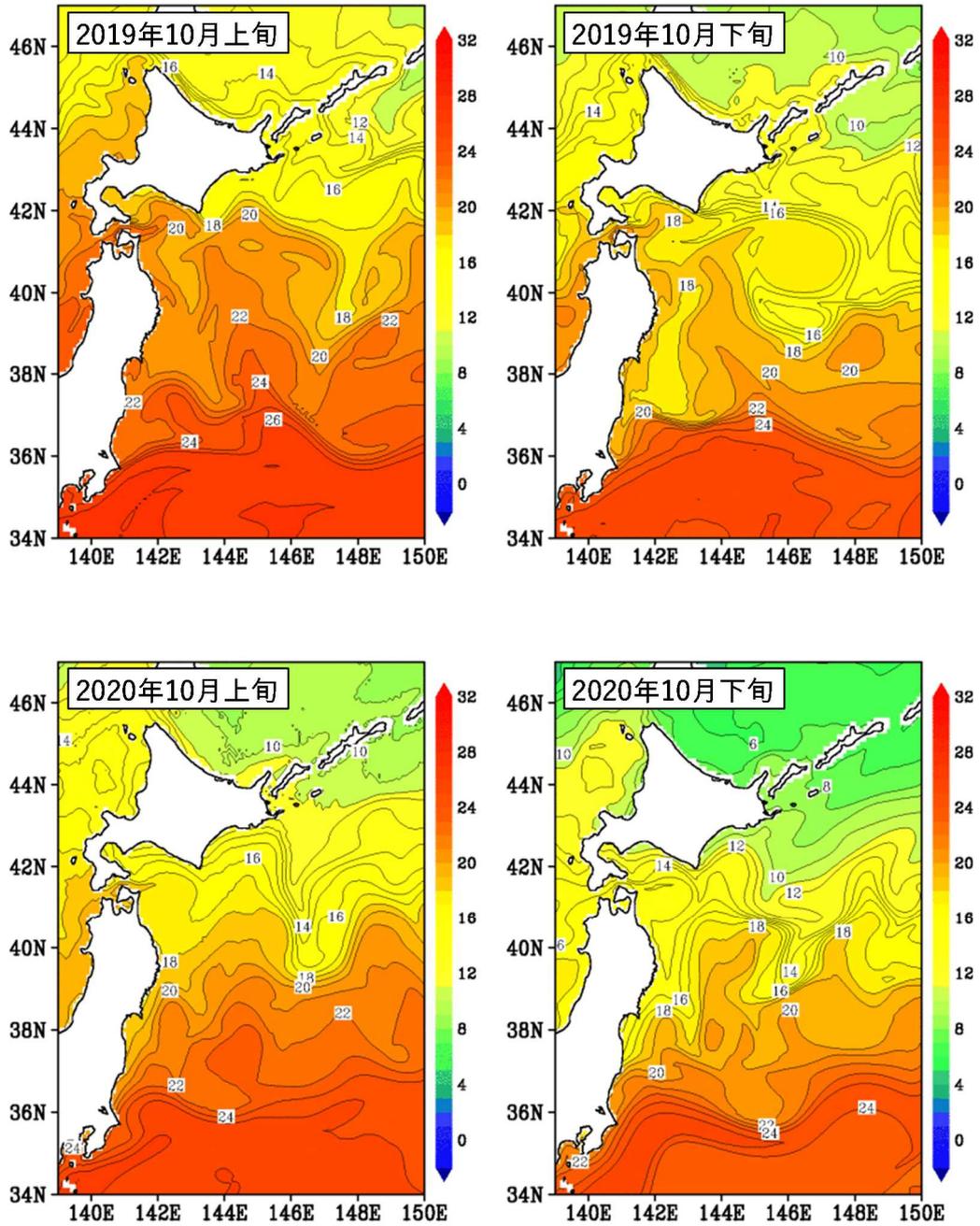


図1. 海況予測システムFRA-ROMSによる2019年、2020年の10月上旬と下旬の海表面水温
(2020年は予測水温)

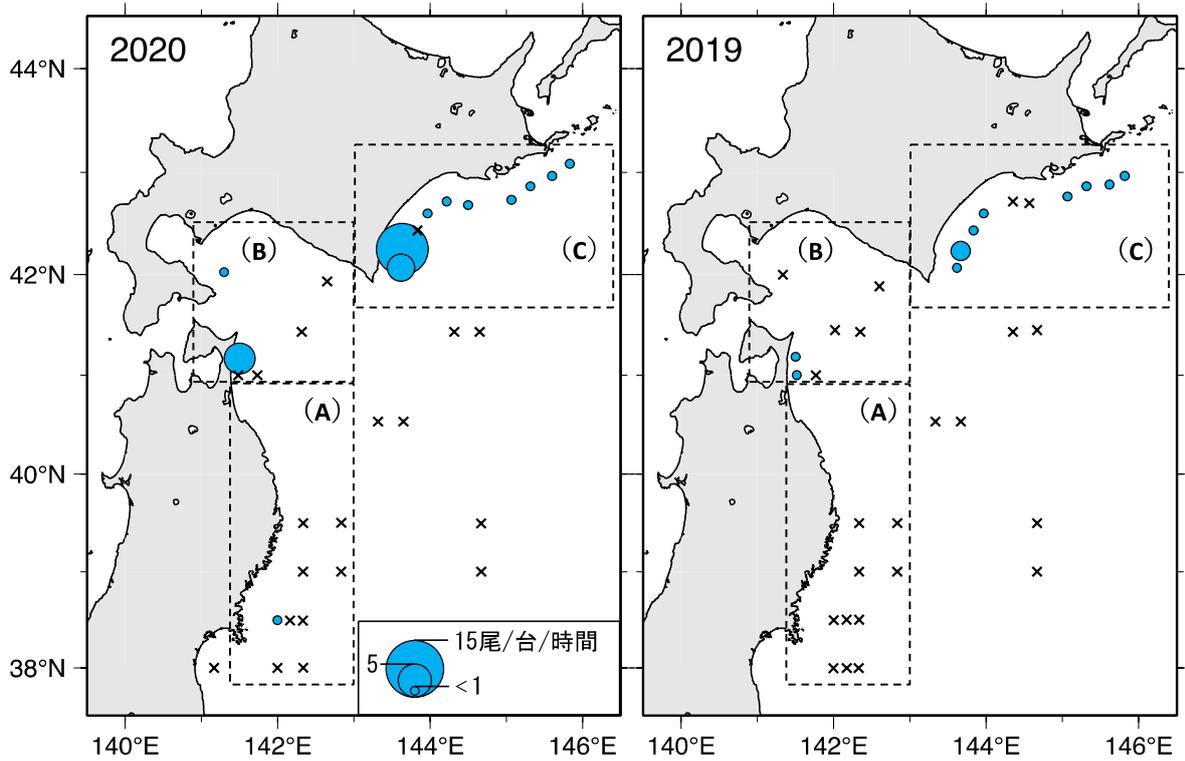


図2. 太平洋におけるいか釣り調査によるスルメイカのCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）の分布

2020年8月～9月（左図）、2019年8月～9月（右図）のいか釣りによるスルメイカのCPUE

（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）の分布を左図右下の凡例にしたがって示す（×は漁獲なし）。破線で囲まれた海域は（A）常磐～三陸周辺海域、（B）津軽海峡～道南太平洋海域、（C）道東太平洋海域および根室海峡～オホーツク海域における来遊量予測の根拠となった調査海域を示す

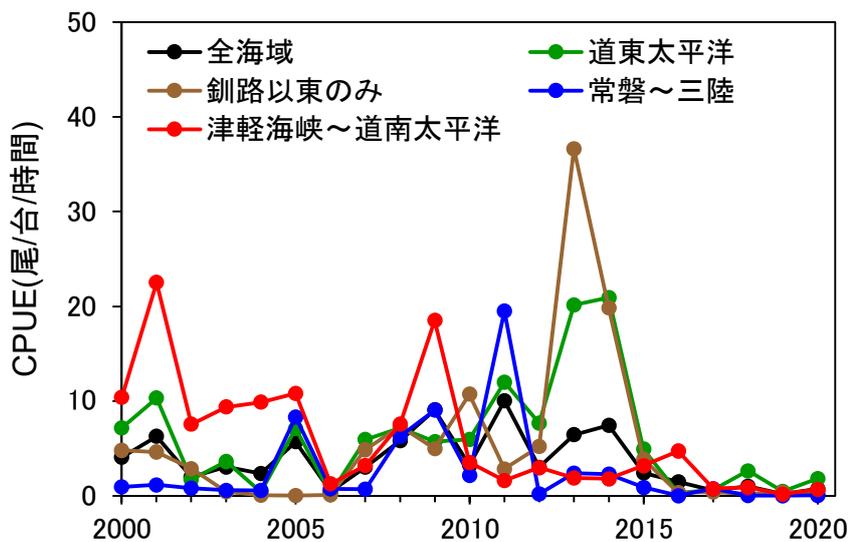


図3. 太平洋におけるいか釣り調査による海域別CPUEの年推移

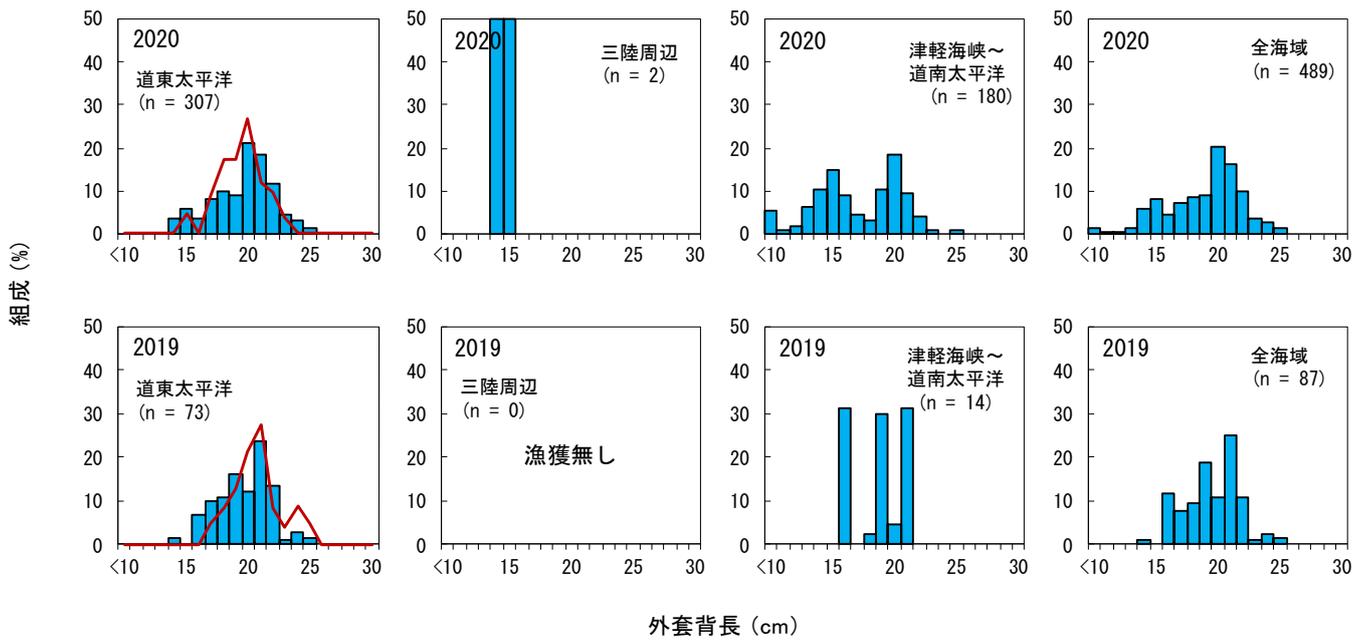


図4. 太平洋におけるいか釣り調査によるスルメイカ外套背長組成の結果

nは測定尾数を示し、最左図の赤線は道東太平洋海域の釧路以東のみの結果を示す

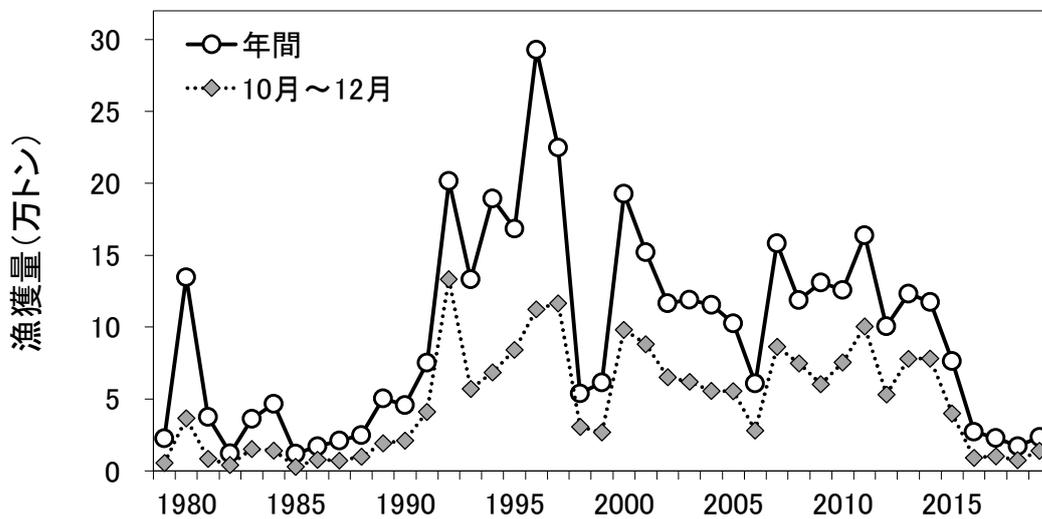


図5. 太平洋（根室海峡～オホーツク海を含む）におけるスルメイカの年間漁獲量（暦年集計）と10月～12月の累計漁獲量の推移

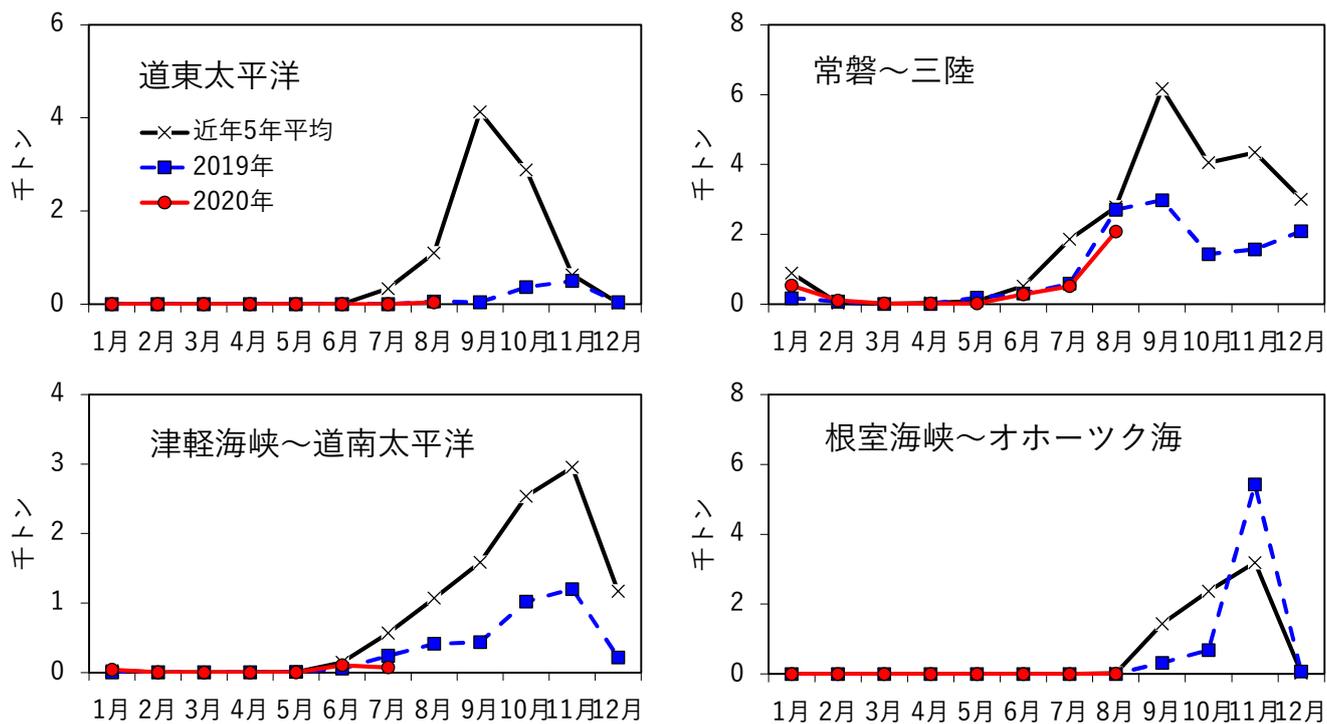


図6. スルメイカの月別海域別の漁獲量（生鮮）
 近年5年平均は2014年～2018年の平均
 （いか釣り・定置網・底びき網・まき網）

表1. 漁況経過（2020年7月～8月、一部9月・未集計・暫定データ含む）

	漁況経過
北海道 道東	<p>本年の太平洋側での初水揚げ日は8月10日（厚岸港、釣り）で、前年（花咲港で7月27日、釣り）より遅かった。</p> <p>道東主要港での釣りによる8月の水揚げ量は33トンで前年（49トン）を下回り、CPUEは前年比67%であった。9月上旬の概算水揚げ量は56トンで前年（24トン）を上回り、CPUEは前年比132%であった。</p> <p>羅臼港では8月25日に釣りによる初水揚げがあり、前年（9月4日）より早かった。釣りと定置網による9月1日から23日までの概算水揚げ量は55トンで前年（74トン）を下回っている。</p>
北海道 道南	<p>函館港での釣りによる8月の水揚げ量は19トンで前年比62%、CPUEは前年比70%であった。</p> <p>浦河港では8月6日に釣りによる初水揚げがあり、前年（9月21日）より早かった。9月上旬の概算水揚げ量は33トンで、既に前年9月の1ヶ月分の水揚げ量（6トン）を上回っている。</p> <p>道南主要港での釣り以外による8月の水揚げ量は集計中である。</p>
青森	<p>大畑港での釣りによる8月の水揚げ量は10トンで前年比63%、CPUEは前年比59%であった。9月上旬の水揚げ量は21トンで前年比14%、CPUEは前年比46%であった。</p> <p>白糠港での釣りによる8月の水揚げ量は137トンで前年比138%、CPUEは前年比96%であった。9月上旬の水揚げ量は22トンで前年比133%、CPUEは前年比170%であった。</p> <p>八戸港での釣りによる8月の水揚げ量は344トンで前年比65%、CPUEは前年比75%であった。9月上旬の水揚げ量は88トンで前年比126%、CPUEは前年比232%であった。</p> <p>八戸港でのまき網による8月の水揚げ量は1,047トンで前年比74%であった。</p> <p>八戸港での全漁法による8月の水揚げ量は1,391トンで前年比72%、9月上旬の水揚げ量は839トンで前年比85%であった。</p>
岩手	<p>岩手県主要港での釣りによる8月の水揚げ量は221トンで前年比93%、CPUEは前年比70%であった。定置網による8月の水揚げ量は12トンで前年比83%であった。</p>
宮城	<p>宮城県主要港での釣りによる8月の水揚げ量は3トンで前年比1124%、CPUEは前年比274%であった。定置網による8月の水揚げ量は1トンで前年比93%であった。底びき網による8月の水揚げ量は10トンで前年比66%であった。</p>
福島	<p>7月～8月は底びき網漁業の禁漁期間である。</p>
茨城	<p>7月～8月は底びき網漁業の禁漁期間である。</p>
千葉	<p>千葉県主要港での釣りによる8月の水揚げは、1隻による10 kgのみであった（前年は合計51隻で869 kg水揚げ）。定置網による8月の水揚げ量は2 kgであった（前年は219 kg）。</p>
神奈川	<p>間口港での釣りによる8月の水揚げ量は0.1トンで前年比39%、CPUEは前年比34%であった。</p>
静岡	<p>仁科港での釣りによる8月の水揚げ量は0.7トンで前年比48%、CPUEは前年比67%であった。</p>
三重	<p>奈屋浦港でのまき網による8月の水揚げ量は0.1トンで前年比65%であった。</p>
和歌山	<p>集計中。</p>
高知	<p>加領郷港での釣りによる8月の水揚げは5トンであった（前年は漁獲無し）。</p>

注：CPUEは1日1隻当たり水揚げ量

参 画 機 関

<p>地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場</p> <p>地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所</p> <p>岩手県水産技術センター</p> <p>宮城県水産技術総合センター</p> <p>福島県水産資源研究所</p> <p>茨城県水産試験場</p> <p>千葉県水産総合研究センター</p> <p>神奈川県水産技術センター</p> <p>静岡県水産・海洋技術研究所</p>	<p>三重県水産研究所</p> <p>和歌山県水産試験場</p> <p>高知県水産試験場</p> <p>一般社団法人 漁業情報サービスセンター</p> <p>(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所</p>
---	---